

# 宗教における熱狂主義とその克服

—使徒パウロの事例—

ペトラ・フォン・ゲミュンデン／ゲルト・タイセン

(東 よしみ 訳)

宗教的な動機を持った熱狂主義は、過去の問題、世俗化が進むにしたがって小さくなっていく問題だと長い間考えられてきました。しかし、宗教的な動機によるテロは、今日でさえ存在しています。例えば、イスラム教のグループによるテロやユダヤ教右派による宗教的な動機を持つテロが挙げられます。インドではヒンドゥー教過激派による非ヒンドゥー教徒への攻撃、ミャンマーではロヒンギヤの追放のような民族浄化という問題が存在します。日本ではオウム真理教という新宗教のセクト、アフリカではキリスト教異端の「神の抵抗軍」による宗教的な動機によるテロが存在します。宗教的な動機による熱狂主義は、今日も続く問題であり、わたしたちは次のように問わずにはいられません。宗教は熱狂主義へと人を駆り立てるのでしょうか。

宗教における熱狂主義は、イエスと初期キリスト教の時代においても存在した問題でした。この論考では、パウロを1つの事例としてとりあげ、1人の人物においていかに熱狂主義と和解とが関連しているのかを見ていきます。パウロ自身の言葉と使徒言行録の証言によれば、パウロは、キリスト信奉者たちの熱狂的な迫害者でした。パウロは、この熱狂を「熱情」(ζῆλος)と呼びます。しかし、パウロは、回心と召命を経験し、和解を宣教する者になりました(Ⅱコリ 5:20)。ある人々の主張によれば、パウロはその生涯において、元来の熱狂主義を完全には克服しませんでした。というのも、パウロは彼のキリスト教徒の論敵たちとしばしば激しい論争を行い、彼らをサタンに仕える者と呪うからです。しかし、パウロ自身の目からすれば、パウロは、自身の熱情(熱狂主義)を乗り越えたのです。熱狂主義者から和解者へというパウロの変化は、容易に理解できるものではありません。そこで、わたしたちは、当時のユダヤ教の状況という枠組みからこの変化を理解しなければいけません。

この論考の前半では、まず、紀元前1世紀から後1世紀におけるユダヤ教の状況を見ていきます。キリスト教徒の迫害者として、パウロが自身を「熱情」の信者であったと宣言する時、それは何を意味するのでしょうか。論考前半では律法への熱情の模

範である、ピネハス、アブラハム、エリヤの3人を見ていきます。後半では、これらの3人の熱情の模範が、パウロにどのような影響を与え、パウロがどのようにこの影響と取り組むのかを見ていくこととします。

## 1.

まずは、紀元前4年のヘロデ大王の死以降のパレスティナの状況を見ていくことから始めましょう。この時期には反乱が起こり、南部では、ベレアのシモンとユダヤ地方のアスロンゲスの2人が反乱を起こし、王になる権利を主張しました。対して、北部のガリラヤの反乱のリーダーであるユダは、厳密な一神教に基づき、神のみが支配すべきという信念を抱いていたので、王になろうとはしませんでした。ヘロデ大王の死後の反乱は、ローマの将軍、プブリウス・クィンクティリウス・ウォルスによって鎮圧されました。ヘロデ大王の領地は、最終的にローマによって分割され、大王の3人の息子が父の後を継ぎました。これはローマ帝国のモットー「分割して統治せよ」に沿うものです。

しかしながら、この取り決めは、ユダヤ地方とサマリア地方では長続きしませんでした。たった10年後の紀元後6年に、ローマはヘロデ大王の息子でユダヤ地方を治めていたアルケラオスを失脚させました。彼らは、自分たちで総督や皇帝属吏を通して領地を支配しました。これは、そこに住んでいたユダヤ人に1つの重大な結果をもたらしました。彼らは今や直接、ローマに納税しなければいけなくなったのです。そして再び、ユダという名の男が立ち上がりましたが、彼は、ガリラヤのユダとして知られ、10年前のヘロデ大王の死後に起こったガリラヤの反乱のリーダーとおそらく同一人物です。このガリラヤのユダは、ローマへの納税を拒否するように民衆に呼びかけました。再び、ユダの主張は厳密な一神教に基づくものでした。すなわち、土地はローマに属するのではなくただ神だけに属するものである。それゆえ、ローマに納税する者は、そうすることによって神のみが支配者であることを否定している。おそらく、ガリラヤのユダは、10年前の自身の軍事的反乱の失敗から学んでいたのです。それゆえ、ユダは、この時は、ローマへの反乱をユダヤ教の信仰の中心、すなわち、唯一の神以外のいかなる神々があってはならないとする第一戒にしっかりと結びつけました。今やユダは軍事的な反乱者ではなく、教師として振舞いました。ユダヤ教の歴史家、フラウィウス・ヨセフスは、ガリラヤのユダを過激なファリサイ派と見なしたようで、「第4の哲学」の創始者と呼びます（サドカイ派、エッセネ派、ファリサイ派の諸哲学とともに）。しかし、ユダは、無害な「哲学者」では到底ありませんでした。納税を拒否するようというユダの民衆への訴えは、基本的にはローマに対す

る宣戦布告であり、ユダは危険人物と見なされました。使徒言行録 5:37 によれば、ガリラヤのユダは暴力的な死を遂げました。ユダが始めた運動は、ユダヤ戦争にいたる時期まで活発でしたが、この時期、ローマの支配に抵抗する多くのグループに分裂しました。これらのグループの 1 つは、ギリシア語の ζήλος (熱情／熱心) から「熱心な人々」(zealous ones) (「熱心党」[Zealots]) と呼ばれました。ユダヤ戦争の際、熱心党員たちは、神殿の中でバリケードを築き、最後まで神殿を守ろうとしたのです。「熱情」は、ここでは「神の家への熱情」すなわち、神殿への熱情をさします(詩 69:10;ヨハ 2:17 で引用)。これらのさまざまな抵抗グループの中には、テロ攻撃をする準備が常にできている男たちがいました。このテロ攻撃は、ローマ人に対してだけでなく、ユダヤ人の「協力者」たちにも向けられました。これもまた当時の「熱情」(ζήλος) の 1 つの側面でした。

イエスもまた、ガリラヤのユダと彼の運動に向き合わなければいけませんでした。皇帝に納税することは許されるかとイエスに尋ねる人々がいました(マコ 12:14)。イエスは、納税を非難しないものの、実際にはガリラヤのユダと一致していたのです。つまり、イエスにとっても、唯一の神だけを礼拝せよという第一戒の掟は、絶対的に優先させるべきものです。しかし、第一戒の直後に、イエスは隣人愛の掟を引用します(マコ 12:29-31 並行)。さらに、イエスは、汝の敵を愛せと主張することによって、隣人愛の要求を強化します(マタ 5:43-44)。そうすることによって、イエスは、ガリラヤのユダに反対したと推測することもできるかもしれません。イエスが前面に押し出した第二戒は、納税を拒むことによってローマという敵に抵抗するよう求めるものではなく、敵をも含めた隣人を愛するよう求めるものでした。本質的には、ここでイエスは、対ローマのユダヤ人の抵抗運動に反対して語っているのであり、イエスが意識的にそうした可能性もあります。その場合、「敵を愛せ」という命令は、一神教を奉じる中で熱狂的になった人々——命をかけて神を愛することは、外国人や敵に対してテロ行為を行う義務があると理解した人々——を念頭に語られた可能性があります。

このようなユダヤ人のラディカルな抵抗運動の由来は、これよりずっと過去に遡ります。外国人に対する抵抗は、前 175-174 年には始まりました。この時、ヘレニズム的な考えに影響を受けた、エルサレムにおける世界市民的な上流階層のユダヤ人は、ユダヤ教という宗教の徹底的な近代化を図ろうとしたのです(I マカ 1:11)。社会と神殿体制は、国際的なヘレニズム文化や生活様式を取り入れるべきとされました。ヘレニズム化しようとするユダヤ人は、ユダヤ教の神 YHWH を、ギリシアの神、ゼウス・オリュンピオスと同一視し、神殿の燔祭の祭壇は国際的な様式で作られました。セレウコス朝の支援によって、エルサレムにはギリシア風のポリスが作られました。

彼らのイニシアティブで前 168 年に制定された宗教法は、通常の犠牲の祭儀や割礼、食物規定などを、死刑によって禁じました。このようにして、ヘレニズム化しようとする、エルサレムにおける少数の上層階級は、シリア王アンティオコス IV 世エピファネスの助けを得て強圧的に改革を起し、それは彼らに政治的、経済的利益をもたらしました。この改革は、地方ではマタティアの指導による反乱を引き起こしました。地方で反乱が始まったのは偶然ではありません。改革の成功によって、地方の民衆は二級市民に落ちぶれたからです。彼らは、この抵抗運動の動機を「律法への熱情」(ζήλος) と呼びました。I マカバイ書は、この抵抗運動の確信を、マタティアが、自身の死の直前、息子たちに残した言葉の中に要約します。マタティアの 2 人の息子のシモンとユダ・マカバイオスは、抵抗運動のリーダーとしてマタティアの後継者でした。わたしたちにとって興味深いことに、マタティアの教育的な言葉は、この熱情の聖書的な模範のリストを挙げます。

<sup>50</sup> 子供たちよ、律法に熱情を傾けよ、我らの父祖の契約に命をかけよ。<sup>51</sup> 我らの父祖がそれぞれの時代になして、大いなる栄光と永遠の名を受け継いだ業を思い起こせ。<sup>52</sup> アブラハムは試練の中で忠実と認められ、それが彼の義と見なされたのではなかったか。(……)<sup>54</sup> 我らの父祖ピネハスは熱情で熱心 (zealous with zeal) であったゆえに、永遠の祭司職の契約を授けられた。(……)<sup>57</sup> ダビデはその憐れみ深さのゆえに、永遠の王座を受け継いだ。<sup>58</sup> エリヤは律法への燃えたつ熱情のゆえに、天にまで上げられた。<sup>59</sup> ハナンヤ、アザルヤ、ミシャエルは信仰のゆえに炎の中から救い出された。<sup>60</sup> ダニエルは潔白さのゆえに獅子の口から救われた。<sup>61</sup> それゆえ代々にわたって次のことを心に留めよ。神に希望をおく者は決して力を失うことはない。(I マカ 2:50-61)

律法への熱情の証人の連鎖の最初に挙がる人物はアブラハムです。アブラハムが模範として見られているのは、息子のイサクを殺し犠牲として捧げることを厭わなかったからです。自身の息子すら犠牲にすることを厭わなかった点にアブラハムの模範としての性質があるという確信は、ユダヤ教と初期キリスト教の多くの文献の中に見出だせます (例えば、ヤコ 2:20-23)。マカバイの抵抗運動のメンバーたちは、たとえ自分の家族の一員であったとしても、信仰から背教したイスラエル人を殺害することを厭わなかったという事実を考慮に入れる時、マタティアの告別説教という文脈におけるアブラハムの例は特別な重要性を持ちます。マタティアは、異教のやり方で犠牲を捧げることを厭わなかったユダヤ人と、これを指示した異教徒の役人を殺すことによって、ユダヤ教の押し付けられた改革に抵抗する反乱を開始しました。これは、告

別説教の直前、I マカバイ 2:23-25 で報告されます。物語の結論部分では、マタティアの熱情が言及されます。

彼は、あのサルの子ジムリに対してピネハスがしたように、律法へ熱情を傾けた。マタティアは町の中で大声をあげて言った。「律法に熱情を傾ける者、契約を固く守る者は皆、わたしに続け。」(I マカ 2:26-27)

この抵抗運動が模範としたのは、自らの子すら殺すことを厭わなかったアブラハムです。マタティアの告別説教は強調します。「それが彼の義と見なされた」(I マカ 2:52; cf. 創 15:6)。

マタティアの告別説教で、アブラハムの後に証人として強調的に言及されるピネハスこそは、実にすべての暴力的な熱狂主義者の模範でした。民数記 25 章によれば、イスラエルの民が荒野で災害に襲われた時、ピネハスは、イスラエル人ジムリと彼のミディアン人の妻を殺害しました。ジムリが外国人の妻と別れようとしなかったからです。律法は、ユダヤ教に改宗する者以外の異教徒との混合婚を認めませんでした。この物語は、災害を背信への罰として見るために、ジムリと彼の妻が殺害された後、災害は治まります。前 2 世紀にマカバイの反乱軍が、ユダヤ教信仰からそれて、異教のやり方で犠牲を捧げることを厭わなかった他のユダヤ人を殺害した時、彼らが做った模範は熱狂主義者ピネハスでした。そして、マタティアは、告別説教においてこのピネハスこそを褒め称え、彼の熱情を明確に強調するのです。「我らの父祖ピネハスは熱情で熱心であったゆえに、永遠の祭司職の契約を授けられた」(I マカ 2:54)。ここで、マタティアあるいはマカバイ記の語り手が取り上げるのは、詩編 106:28-31 におけるピネハスへの賛辞です。そこでは、「それ(=彼の熱情)が彼の義と見なされた」というフレーズが使われます。このフレーズは、創世記 15:6 でもアブラハムとの関連で使われているのを既に見ました。

マタティアの告別説教が、その熱情を明確に強調する 3 番目の人物は、預言者エリヤです。「エリヤは律法への燃えたつ熱情のゆえに、天にまで上げられた」(I マカ 2:58)。エリヤの熱情もまた、宗教的な理由によって人を殺害することにあります。エリヤはバアルの祭司たちを殺しました。エリヤ自身が列王記上 19:10 でこう述べます。「わたしは万軍の神、主に熱意をもって熱心に仕えてきました (Being zealous, I have been zealous for the Lord Almighty)。というのもイスラエルの子らはあなたを捨て、あなたの祭壇を破壊し、預言者を剣にかけて殺しました。このわたし 1 人だけが残り、彼らはこのわたしの命をも奪おうと狙っています」(王上 19:14 をも参照)。この事例においてもまた、熱情とは、背信して他の神に仕えるイスラエル人に対してとら



れる暴力的行為です。だからこそ、エリヤもまた、ピネハスとアブラハムと並んで、ユダヤ人の抵抗運動の偉大な模範の1人なのです。

この前2世紀の抵抗運動による反乱は成功しました。この反乱とユダヤ教とを公平に評価しようとするならば、次の2点を覚える必要があります。

第1に、ヘレニズム化の改革という文脈の中で、敬虔なユダヤ人たちは、弾圧され脅かされていました。改革者たちは、改革を強圧的に、死刑をも含めて行いました。敬虔なユダヤ人は、彼らの「古風な」信仰とそれに結びついた宗教的諸行為を諦めるよう強要されました。「熱狂的な」諸グループは、敬虔なユダヤ人の宗教的諸確信を暴力的に攻撃した改革に対抗して、信仰を守るために形成されたのです。続くユダヤ教の歴史は、暴力に訴えることを辞さないという点に特徴があります。マカバイの反乱の暴力的行為は、搾取されコーナーにまで追い詰められた者たちによる事実上の防衛でした。この反乱が起こらなければ、ユダヤ人たちが自分たちの文化的アイデンティティを保持することができたのかどうか分かりません。他の多くの民族は、ヘレニズム諸国家とローマ帝国の中へ吸収され、独自の伝統の痕跡は残っていないのです。

第2に、より重要な点として、当時のユダヤ教においては、外国のものすべてに対して孤高を保つ、このような潮流だけが存在していたのではないということです。反対の強い潮流もまた存在していました。例えば、預言者ヨナの短い話にこのような潮流を見ることができます。ニネヴェの街に対して預言をするように命じられたヨナは、逆方向に逃げようとして命令に背きます。最終的にヨナがニネヴェに着くと、非ユダヤ人であるニネヴェの人々は罪の告白をしました。そうすることでニネヴェの人々は、預言者たちがユダヤの民に常に求めてきたこと、すなわち回心を成し遂げました。ヨナは、これについて神に激しく不平を述べました。ヨナは、神によって否定されたように感じたのです。

このような両方の潮流——外国人に境界線を引く潮流と、反対に、外国人にオープンである潮流——は、捕囚後のユダヤ教において並行して存在しました。両方の潮流は、それぞれの態度に——それが熱狂主義までいくような境界線を引く態度であろうと、開放に向かう態度であろうと——宗教的な正当化を施しました。後1世紀には、イエスはヨナに訴えかけました（マタ 12:38-41 / ルカ 11:29-30）。イエスは、外国人に対して開放的であったユダヤ教の潮流に属していたのです。しかしながら、使徒パウロは、外国人に対して境界線を引く「熱情」に訴えかけたのです。もともとパウロは、異教徒たちから十分な距離をとらなかったという理由で、イエスの信奉者たちを迫害しました。

この論考の後半は、パウロという人物に集中します。パウロは本当に「熱情」の信奉者であったのか。パウロが、回心によってこの熱情から自由になったと述べる時、

わたしたちはパウロを信じていることができるのかという問題を検討していきます。その際に参照するのは、マティアスの告別説教の中で最も重要な役割を果たした熱情の 3 人の模範、ピネハスとアブラハムとエリヤです。

パウロの回心以前の人生において、これらの 3 人の熱情の模範が重要な役割を果たしたということを示すものは何か存在するのでしょうか。パウロは、アブラハムとエリヤに直接言及しますが、ピネハスの名前に言及する箇所はありません。しかし、ピネハスこそが、第二神殿期ユダヤ教とそれ以降における、最高の熱狂主義者でした。ですから論考の後半では、まず、パウロの人生におけるピネハスの痕跡を見ていくこととします。

## II .

### 1. パウロの人生にピネハスの痕跡はあるのか？

パウロ自身は、ダマスコ郊外で起こった彼の生涯の大きな転換点について、2 回にわたって述べています。第 1 の説明はガラテヤ書 1 章で、これを召命、すなわちすべての民の間で宣教の働きを行うようにという使命が与えられた出来事として表します。第 2 の説明であるフィリピ 3:4 以下は、これを回心、すなわち彼の諸確信の変化として表します。これらの 2 つの説明は、パウロの回心／召命以前の期間に関して次の 2 点において一致します。

- (1) 第 1 に、パウロは、回心／召命以前の彼の熱情について語ります。
- (2) 第 2 に、この熱情はパウロがキリスト信奉者たちを迫害した動機でした。

これらの点は双方ともに、ピネハスがかつてパウロにとっての熱情の模範として機能していたという考えと一致するものです。

さらに、ピネハスと関連する特徴を 2 点挙げることができます。

- (3) 第 3 に、外国人、つまり非ユダヤ人に対する境界線です。ピネハスは、ジムリの妻が異教徒のミディアン人であったので、ジムリを殺しました。
- (4) 第 4 に、義に対する努力です。ピネハスの熱情により、彼は「義」と見なされます。

最後の2点は、パウロの説明の双方に現れるわけではなく、それぞれ、片方の説明にしか現れません。

第1のガラテヤ書の説明において、パウロは、「ユダヤ教」における自身の人生のあり方を強調します。鍵語「ユダヤ教」(ιουδαισμός)は、「ギリシア世界」「ヘレニズム」(έλληνισμός)に対する境界線を間接的に示唆します。パウロの生涯の大きな変化は、ガラテヤ書1章によれば、異教徒への宣教の召命を受けたことにあるという事実は、この境界線の重要性を示します。外国人に対する境界線は、外国人を勝ち取ろうとする試みにとって代わられたのです。

#### パウロの召命 (ガラ 1:13-16)

召命前： あなたがたはわたしのユダヤ教における以前の生涯について聞いています。わたしがどのように神の教会を暴力的に迫害し、それを破壊しようとしたのかを。わたしは、わたしの民の同年代の多くの者よりもユダヤ教において進んでいて (προέκοπτον)、父祖たちの伝統にわたしは極めて「熱心」だったのです。

召命： しかしわたしが生まれる前からわたしを選び、恵みによってわたしを召した方は、御子をわたしに啓示されることを良しとしました。そうしてわたしが異教徒に御子を宣教するために。

パウロは、異教徒へのこの開放をIコリント9:19-23で美しい言葉で描写しました。パウロは、すべての人に、すべてのものとなることを欲します。ユダヤ人にはユダヤ人のように、異教徒には異教徒のように、律法を守る者には律法を守る者のように、律法なしで生きる者には、律法なしで生きる者のように。

第2のフィリピ書における報告では、第4の特徴、義への努力が現れます。ここでパウロは、律法に関してはファリサイ人、熱情に関しては共同体の迫害者、義に関しては「律法の下で非の打ちどころのない者」であったと述べます。

#### パウロの回心 (フィリ 3:4-7)

もし誰かが肉において自信があるというのなら、このわたしはもっとあります。



誕生： わたしは 8 日目に割礼を受け、  
イスラエルの民、それもベニヤミン族の出身で (ἐκ)  
ヘブライ人の中の (ἐξ) ヘブライ人です。

回心前： 律法に関しては (κατὰ νόμον) ファリサイ人  
熱情に関しては (κατὰ ζήλος) 教会の迫害者  
律法の下での義に関しては (κατὰ δικαιοσύνην) 非の打ちどころのない者でした。

回心： しかし、わたしにとってかつて有利であったこれらのことを、キリストの  
ゆえに損失と見なすようになったのです。

パウロが過去を振り返って、「律法の下での義に関しては、非の打ち所のない者でした」と述べる時、パウロがほのめかしているのは、ピネハスの事例と同様に、異教徒に開かれていたイスラエル人に対するパウロの暴力的な迫害が「義」と呼ばれるという事実であるとわたしたちは考えます。詩編 106:31 (LXX 105:31) がピネハスについて述べることを思い出しましょう。「そしてそれが彼の義と見なされた。代々にわたりとこしえに」。「熱情」に関しては、パウロはキリスト信奉者たちを迫害し、「義に関しては非の打ち所のない者」でした。つまり、ちょうどピネハスの事例のように、パウロの熱情は彼にとっての義と見なされたのです。

これらの 4 つのパウロにおける特徴——熱情、迫害、外国人への境界線、義への努力——は、パウロが回心以前にピネハスを賞賛していたことの直接的な証拠では確かにありません。しかしながら、これらの特徴はすべてそのような賞賛を示唆します。すでに見たように、パウロの熱情 (ζήλος) は直接的に言及されます。多くのユダヤ教文書 (詩 106[105]:30 以下、シラ 45:23、フィロン、後のラビ文献も) はピネハスを熱情の模範的人物とするのですから、パウロもまたピネハスを賞賛していただろうと考えられるのです。

このことは、パウロが、キリストを宣教するようになった後にピネハスとは全く異なる仕方で振る舞ったという明確な証拠を、ことさらに興味深いものにします。ピネハスは、ユダヤ人と非ユダヤ人とのすべての混合婚を否定しました。混合婚によってユダヤ人のパートナーが異教で「汚される」ことを恐れたのです。異教徒は不浄を広めるのです。反対に、パウロは I コリント 7 章でキリスト教徒と非キリスト教との間の混合婚を認めます。このような夫婦は、非キリスト教徒の側が離婚を求めるのでない限り、離婚すべきではありません (I コリ 7:12-13)。この箇所は、パウロが若い

時期の熱情から大きく離れたことをはっきりと示します。

また、パウロ自身がガラテヤ 1:14において、同世代の人々より熱情において「進んでいた」(προέκοπτον) と強調することは、わたしたちのユダヤ教理解にとって重要です。パウロはそう述べることによって、自身は例外であったと間接的に主張しています。当時のユダヤ人が皆、熱情に満たされていたわけではありません。当時の平均的なユダヤ人は熱狂主義者ではなく、パウロの同輩でさえ、皆が熱狂主義者であったわけではないのです。使徒言行録は、パウロが高名な教師ガマリエルの元で勉強したと伝えます(使 22:3)。ガマリエルはとても寛容であったとされ、キリスト信奉者の迫害に反対したとされます(使 5:34-39)。しかし、ガマリエルの弟子パウロは、まさにそのキリスト信奉者たちを迫害したのです。使徒言行録の著者は、教師ガマリエルを弟子パウロの反対像と描きたいために、ガマリエルの寛容を強調するのでしょうか。そうではなく、この言行録の記述には、歴史的な核があるようです。というのも、ガマリエルのようなファリサイ派はユダヤ教の最もラディカルな人々とは大きく異なっていたからです。エッセネ派と比べると、ファリサイ派はより寛容でそれほど厳格ではありませんでした。確かにファリサイ派の中には、当時ラディカルな立場をとって、ローマ帝国への納税を拒んだガリラヤのユダと行動を共にした人もいました。つまり、熱狂主義者の何人かは、ラディカル化したファリサイ派だったのです。パウロもまた、より寛容なユダヤ教の出身で、ガマリエルの弟子のファリサイ派として寛容だったのかもしれませんが、しかし、多くの人が若い時にそうするように、パウロは一時的にラディカルな立場をとりました。キリストへの回心は、基本的には、ユダヤ教のラディカル派から、リベラル派への転向でした。キリスト信奉者たちは、当時、まだ明確にユダヤ教に属していたのです。

## 2. パウロの人生におけるアブラハムの痕跡

マティアスが言及する熱情の模範の最初の人物はアブラハムでした。マティアスが念頭においていたのは、アブラハムが自分の息子を犠牲に捧げることを厭わなかったことです。神への徹底的な従順において、アブラハムはすべてのユダヤ人にとって偉大な模範であり、ほとんどすべてのテキストにおいて、アブラハムの信仰は、イサクを犠牲に捧げることを厭わなかった点にあるとされます(知 10:5、シラ 44:20)。

この時代でさえ、神が父親に息子を殺すように命じるという考えに抵抗を覚えるユダヤ人もいました。ヨベル書によれば、神を説得してアブラハムを試み、息子イサクを犠牲として捧げるように要求したのは、サタン、マステマの王子でした(ヨベ 17:15-18:16; 19:8)。しかし、アブラハムは試みに打ち勝ち、信仰の人であることを示したのです。

初期キリスト教文書においても、アブラハムの信仰は、イサクを犠牲として捧げることを厭わなかった点にあると見られています（Iクレ 10:7）。アブラハムの信仰、あるいは、彼が試みに打ち勝ったことは、常に、イサク奉獻への言及とともに語られるのです。

しかし、これはパウロにおいては異なるのです。パウロは、ローマ 4 章において、アブラハムを信仰の例としますが、それは、アブラハムが息子イサクを犠牲として捧げることを厭わなかったからではなく、イサクを与えるという神の約束を信じたからです。アブラハムは、無から新しい命を作り出すことができる神を信じました（ロマ 4:17）。これが意味するのは、神は、子孫を残すには年をとりすぎたアブラハムとサラに、子供を与えることができるということです。ここでパウロは、アブラハムの信仰と忠実さを、イサクを殺すことを厭わなかった点に見出す、よく知られたユダヤ教の伝統からは離れます。このユダヤ教伝統では、殺そうとする態度を克服するのは、神だけであるとします。すなわち、最終的に神がイサクを捧げるようにという要求を撤回するのです。

第 2 の新しい側面はこの点と関連します。アブラハムはもはや敬虔なユダヤ人の模範ではなく、義とされた罪人の模範なのです。アブラハムを通して、パウロは、罪人である人間——すなわち、試みに打ち勝たなかった人間——が神によって義とされることを示します。パウロはダビデの例を引いてこれを説明します（ロマ 4:6-8）。

ダビデもまたマテウスの告別説教の中で言及される人物ですが、ここでは他の人物と同様、模範的な人間とされます。「ダビデは、その憐れみ深さのゆえに、永遠の王座を受け継いだ」（I マカ 2:57）。反対に、パウロはローマ 4 章でダビデの罪をほめかし、70 人訳詩編 31:11-12 を引用します。

不法が赦され、罪を覆い隠された者たちは幸いである  
主に罪を見なされない人は幸いである。（ロマ 4:7-8）

この箇所直前、パウロは、創世記 15:6 のアブラハムに関する宣言を引用します。「アブラハムは神を信じた。そしてそれが彼の義と見なされた」（ロマ 4:3）。ユダヤ教の聖書解釈の原則によれば、これらの聖典からの様々な引用には、似たような音の単語が含まれます。「見なす」という動詞は、まずは罪を見なさないこと、そして義と見なすこととして使われます。ラビによる解説の原則によれば、両方の箇所を用いてお互いを解釈することができます。これが意味するのは、アブラハムの信仰を義と見なすことは、彼の罪を見なさないこと——それは赦しと義認なのです。アブラハムは、敬虔な人の模範ではなく、赦された罪人の模範なのです。

さらに、「義と見なす」という表現にわたしたちがすでに何度も行き当たったのは驚くべきことです。この表現は、マティアスの告別説教に見られます。「アブラハムは試練の中で忠実と認められ、それが彼の義と見なされたのではなかったか」（I マカ 2:52）。これはピネハスの熱情について述べる詩編 106[105]:31（「それは彼の義と見なされた」）の暗示／引喩です。

似た表現はヨベル書でシケム人を殺したシメオンとレビに使われます。「それは彼らの義であり、このことは彼らの義のために書かれた」（ヨベ 30:17-18）。アブラハムとピネハスのように、ここでも殺すことは「義」と見なされ、彼らの話は「記述された」とされます。すなわち、創世記 34 章に記述されたのです。

これが意味するのは、アブラハムとピネハスの熱情が「義」と見なされたように、パウロもまた彼の熱情が「義」と見なされることをかつて願ったということなのでしょう。パウロはキリストへの回心の後に、この熱情こそが深刻な間違いであったとを認識しなかったのでしょうか。しかしこの間違い——つまりキリスト信奉者の迫害——は、キリストがダマスコ郊外でパウロに現れた時に赦されたのです。ここでパウロは、キリストへの信仰へと勝ち取られました。この信仰によって、パウロは義とされたと同時に、道を誤ったパウロの熱情は赦されたのです。回心前にパウロが崇拜したのは、息子を犠牲に捧げることを厭わなかったアブラハムでした。回心後にパウロが模範としたのは、「死者を生かし、無から有を呼び出される神を（……）信じた」（ロマ 4:17）アブラハムでした。

### 3. パウロにおけるエリヤの痕跡

マティアスの告別説教における熱情の証人のリストの中から、パウロが言及する 3 番目の人物は預言者エリヤです。ローマ 11 章がわたしたちにとって興味深いのは、パウロはここでエリヤと自分自身をほぼ明確に同一視するからです。パウロは問いから始めます。「では尋ねよう。神はご自分の民を退けられたのか。決してそうではない。わたし自身もまたイスラエル人で（……）」（ロマ 11:1）。パウロは、救われたイスラエルの民のメンバーの 1 人であることを強調します。パウロはすぐに続けてエリヤについて語りますが、エリヤもまた多くのメンバーの中からただ 1 人残された者と主張した人物です。「それともエリヤについて聖書に何と書いているのか、あなた方は知らないのですか。彼はイスラエルを神にこう訴えています。『主よ、彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇を壊しました。そしてわたしだけが残りましたが、彼らはわたしの命をねらっています』」（ロマ 11:2-3）。エリヤについて語る時、パウロが間接的に自分自身を意味しているのは明らかです。パウロとエリヤには以下の 3 つの共通点があるからです。

- 1) 第 1 に、パウロのように、エリヤは死の危険にあります。エリヤは嘆きます。「彼らはあなたの祭壇を破壊し、預言者たちを剣にかけて殺しました」(王上 19:10)。パウロは、順を逆転して、彼自身の状況にとって重要な嘆き(「彼らはあなたの預言者たちを殺し」[ロマ 11:3])から始めます。次にパウロは、祭壇の破壊に言及しますが、これは、キリスト信奉者たちの共同体と彼らの礼拝の破壊を意味しているのかもしれませんが。いずれにせよ、パウロはここですでに彼自身の個人的状況について考えているのです。エリヤの人生が脅威のもとにあったのと全く同じように、パウロは彼の人生において脅威を感じているのです。
- 2) 第 2 に、エリヤは、自分だけがイスラエルの民の中から義しい者として残され命が狙われていると不平を述べます(ロマ 11:3b)。パウロもまた孤独を感じています。パウロの議論は最初からエリヤを視野に入れているため、ローマ 11:1 でイスラエルは神によって拒否されたという主張を論駁する時、パウロは、すべてのユダヤ人キリスト者に言及するのではなく——そうするのが当然ですが——自分自身にだけ言及するのです。エリヤは彼だけが残されたと思いました。したがって、パウロはローマ 11 章でエリヤに訴えて、神はご自身の民イスラエルを退けたという主張に対抗する証拠とするのです。
- 3) エリヤが祈りによって啓示を受けたのと同じことが、パウロにも起こります。エリヤのようにパウロも神に嘆願し(ロマ 10:1)、パウロもまた啓示によって慰められるのです。エリヤは、7000 人の忠実な信者たちに関する神の託宣(χρηματισμός)を受けました。「わたしはわたしのために、バアルに膝をつかなかった 7000 人を残した」(ロマ 11:4)。パウロには、すべてのイスラエルが救われるという「神秘(μυστήριον)」が後に啓示されました(ロマ 11:25ff.)。

わたしたちにとって驚くべき、決定的な事柄が 1 つあります。パウロはローマ 11:3 でエリヤの嘆きを引用しますが、この嘆きの重要な部分を省略します。パウロはここでエリヤの熱情への言及を省略します。エリヤがこの場面の直前にバアルの預言者たちを迫害、殺害したことをパウロは語りませんが、まさにこれこそがエリヤの熱情です。パウロが述べるのは、エリヤは迫害されたということだけです。パウロは、迫害されたエリヤと自身を同一視できるのですが、熱情を持ったエリヤとは同一視できません。なぜなら、パウロもまた迫害を受けていたからです。パウロは、エルサレムに発つ直前にローマ教会に手紙を書きます。パウロは、エルサレムで彼の命を狙ってい



る人々がいることを知っていて、ローマ書の結びで、この敵から救われるように、自分のために祈ってくれるように頼むのです（ロマ 15:30-31）。

パレスティナにおける出来事は、パウロが恐れた通りになります。パウロがエルサレムで神殿を訪れた時、騒乱が起きました。というのも、パウロが神殿の境内に異教徒を連れて行ったという噂が広がったからでした。この領域に入った異教徒への罰は死でしたが、熱狂主義者たちは、この威嚇を神殿の境内に外国人を連れ込んだユダヤ人にまで拡大して当てはめたと考えられます。それゆえ、神殿の外庭における騒乱は、すでにパウロを殺そうとした最初の試みであったと推測することができます。この出来事において、パウロの命は、パウロを逮捕したローマの兵士たちによって救われました。しかしパウロの敵たちは、そう簡単には諦めませんでした。熱狂的な男たちのグループは、パウロを殺すことを誓いました（使 23:12-22）。パウロを殺そうという企みについて聞いた、エルサレムに住むパウロの甥は、パウロをこの企みから救い出しました（使 23:16）。パウロの甥は、このテロリストグループと何らかのコンタクトをもっていたに違いなく、だから彼らの陰謀を知ることができたのです。パウロのエルサレムにおける親類が、暴力行使を辞さないグループと接触していたとすれば、パウロ自身もかつてこのようなグループと係りを持っていた可能性があります。パウロがこのような暴力的なサークルについてよく知っていたのは、彼自身が若い時期に、裏切り者に対して力で臨むこのような暴力的なグループに一時的に属していたからだと推測しなければいけません。

結論として、以上の研究成果をまとめます。パウロは、その熱情のためにイスラエルの歴史において模範とされてきた3人の人物たちと集中的に取り組みました。パウロ自身がまだキリスト信奉者を迫害した熱狂主義者であった時、パウロは、自らの模範をピネハス、アブラハム、エリヤに見出しました。しかしダマスコス途上のキリストとの出会いという彼の人生の大きな転換点の後に、パウロはこれらの3人の模範を評価し直します。パウロはピネハスという人物をよく知っていたと思われませんが、手紙の中でピネハスに言及さえしません。これは、人をも殺害するピネハスの熱情は、パウロにとって不可能になったことを示唆します。アブラハムとエリヤに関しては、状況は異なります。彼らはパウロにとって偉大な模範であり続けたのですが、それは、パウロが彼らを根本的に再評価、再解釈した後でした。アブラハムは、新しい命を与える神への信仰ゆえに、パウロにとっての模範です。パウロにとって模範また導き手は、子を与えるという約束を信じたアブラハムだけでした。また、パウロは、迫害され、見捨てられたと感じた預言者エリヤにだけ訴え続けました（ロマ 11:3 以下）。

パウロは、熱情の伝統から来て、かつて誇り高い熱狂主義者でした。おそらく、パ

パウロはユダヤ教徒としてのアイデンティティーを求めて、ディアスポラからエルサレムへと移った若い時期に一時的にラディカル化したのでしょう。ダマスコ郊外——すなわち、再びディアスポラ——においてキリストと出会うことを通してパウロは回心し、彼の熱狂主義は癒されたのです。

わたしたちがこのことを念頭においてパウロの手紙を読む時、奇妙にも研究者の関心を集めていない、驚くべき事柄を説明することができるかもしれません。イエスは、信仰の中心に2つの掟をおき、神への愛という最高の掟を、同等の価値を持つ隣人愛の掟と組みあわせました。驚くべきことに、パウロには、この2つの愛の組み合わせを反響させるものが何もないのです。パウロは、最高の掟として隣人愛の掟のみに言及します。パウロは、律法全体は隣人への愛で完成すると見ます（ロマ 13:9）。これは、律法が、神への愛と隣人愛の2つの掟において完成すると見るイエスよりもさらにラディカルな立場です。イエスにとって、神への愛は、心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして唯一の神に自らを捧げることを意味しています。

パウロはもちろん、この第一戒を知っています。パウロは、ローマ 3 章でこれを暗示します。「それとも神は、ユダヤ人だけの神でしょうか。異教徒の神でもないのですか。そうです、異教徒の神でもあります。実に、神は唯一だからです。この神は、割礼のある者を信仰によって義とし、割礼のない者をも同じ信仰によって義としてくださるのです」（ロマ 3:29-30）。パウロが一神教的な唯一神に言及するのは、ユダヤ人と非ユダヤ人との境界線を乗り越えるという目的がある時だけなのです。

ですからわたしたちは、こう推測できます。パウロは第一戒を知っているにもかかわらず、それを引用しないのです。パウロは熱狂主義者としての過去の経験から、この掟がユダヤ教の内外で異なる信条を持つ人々に対して行動を起こす際に乱用されていたことを知っていたのです。だからこそ、パウロは、隣人愛の掟を最も決定的な掟と見るのです。I コリント書は、13 章の愛の讃歌でクライマックスを迎え、パウロは次のように述べます。「愛は忍耐強く、愛は親切で、愛は妬まず（οὐ ζηλοῖ）、自慢せず、高ぶらず、礼を失せない。愛は自分のやり方に固執せず、いらだたず、恨みを抱かない」（I コリ 13:4-5）。

再び最初の問いに戻りましょう。宗教は人を、熱狂主義や不寛容へと導くのでしょうか。パウロの事例は、宗教が人を熱狂主義者へと変え得ることを示します。しかし、それ以上のことをも示します。不寛容と熱狂主義という間違っただ道に進んでしまった宗教的な人々でさえも、方向を転換することができるのです。迫害者であった人でさえも、和解者になることができるのです。イエスはキリスト教の土台であり、パウロは建築者です。キリスト教の最初期に、不寛容から寛容へ、熱狂主義から和解者へと変化することができることを体現した人物がいたことは幸いです。パウロはイ

エスとの出会いによってこの回心を遂げましたが、それは、パウロのキリストへの信仰のまさに中心に根付いているのです。

パウロのモデルはわたしたちにこう教えます。一時的にラディカル化する若者たちも、熱狂主義に背を向けることができるということをわたしたちは信じなくてはなりませんし、この希望を決して捨ててはいけません。このような仕方ではパウロのモデルは希望と結びついています。宗教的な熱狂主義者たちは回心することができ、以前には大惨事をもたらしたのと同じ熱情で、和解と寛容とに献身することができるのです。

付記 この原稿は、ペトラ・フォン・ゲミュンデンとゲルト・タイセンが共同で2018年に書き下ろしたものであり、その内容は2人の共著 *Der Römerbrief. Rechenschaft eines Reformators* (Vandenhoeck & Ruprecht, 2016) の議論を発展させたものである。ブライアン・マクニールが原稿を英訳し、2018年10月30日にフォン・ゲミュンデンが、単独で関西学院大学神学部秋季学術講演会で“Religious Fanaticism and Overcoming It: The Case of Paul the Apostle” というタイトルで講演した。東よしみが英語原稿を邦訳した。